

# 書評

上田信著

## 『貨幣の条件 タカラガイの文明史』

(筑摩書房、二〇一六年)

柿沼 陽平

本書は、立教大学文学部で長らく教鞭を執られ、海・森・トラ・ペスト・蜃気楼王国等々の用語を駆使し、さまざまな角度から東洋史学を牽引してこられた上田信氏の待望の新著である。上田氏の著作にはおおくの一般書がふくまれるので、それらに親しんだことのある一般読者も少なくないであろう。その研究範囲は一国史的範疇にとどまることなく、一時代的議論に限定されることもない。その意味で上田氏の興味関心はゆるやかに大きな広がりを見せている。本書もそのようなグローバルで通時代的な歴史書であるといえる。ただし本書は、その副題にみられるとお

り、タカラガイというきわめて微細なモノを検討対象としている点で、たんなる概説書とは一線を劃する。かように幅広い視野をもつ本書を評するのは容易でなく、たかだか中国古代のタカラガイを研究したことのある評者（『中国古代貨幣経済史研究』汲古書院、二〇一一年。以下、柿沼二〇一一）の手に負えるものではない。この点は前もって白状しておかねばならない。ただ、タカラガイを愛し、また貨幣に人生を振り回される者の一人として、本書の面白さを伝えんがため、敢えて筆をとる。

### 序 章 知的冒険のはじまり

#### 第一部 時をたどる旅

##### 第一章 文明黎明期

##### 第二章 雲南の諸王国

##### 第三章 モンゴル帝国下の雲南

##### 第四章 明朝と琉球王国

##### 第五章 タカラガイ通貨の崩壊

#### 小 結 タカラガイの経済理論

#### 第二部 場をめぐる旅

##### 第六章 ムアンと呼ばれる小宇宙——タイ系民族

##### の世界

##### 第七章 棲み分ける諸文化——雲南山地の世界

##### 第八章 ダライラマが観た歌舞劇——ラサの祭り

上田信著『貨幣の条件 タカラガイの文明史』（柿沼）

第九章 神々の舞う大地——アムドゥチベツト族の世界

第十章 シャーマンが身につけるタカラガイ——

大興安嶺のふもとにて

終章 人類にとってタカラガイとは何か

**序章。**「貨幣は使うもの、貨幣に使われたらつまらない。そういう生き方を貫くためには、貨幣の本質を見抜く必要がある。なぜ人類は貨幣を持つに至ったのか。この問いに答えるべく、「貨幣」の語に織り込まれている「貝」字、すなわちタカラガイとヒトとの関係を論ずる。そこで文明の規定要因を生態区分に求める梅沢忠夫の生態史観モデルや、物産複合（社会の生産様式を形作るためにセットになった物の複合体）のありように求める川勝平太の海洋史観をふまえ、「文明の交易史観」を提唱する。ここでいう交易とは多様で、制度化された略奪に始まり、互酬・貢納・徴収と効率を高め、最終的に市場にいきつく（ただし情報の不完全性のため、市場はつねに不完全）。交易対象物たる「財」のうち、多くのモノやサービスと交換される可能性をもつものを「貨幣」とよぶ。他の動物と異なり、ヒトだけが交易を行い、より大量で多様な物産をより効率的に交易できる方向に文明が発展する。こうした考え方を「文明の交易史観」とよぶ。

**第一章。**出アフリカ後の初期人類は沿海地域に暮らした。

一万年程前に氷期が終わると、温暖化が進み、多様な森林が生まれ、人びとは各生態環境に即して成立した文化同士でモノを交換し、必要物資を入手するようになり、交易の時代が始まった。東ユーラシアの新石器時代は前六〇〇〇年頃に開幕し、前三〇〇〇年頃のヒブシサーマル期終了に伴い、文化伝播時代から文化間交流時代へ転換した。この頃、西から齎されたとおぼしい東ユーラシア最古のタカラガイが登場する（前三三〇〇年頃の新石器時代上孫家寨遺跡出土）。その後、二里頭文化第三、四期になると、タカラガイは南シナ海から海上ルートで山東に運ばれ、中原を核とする「タカラガイ好みの文化圏」が生まれた。四川省三星堆遺跡でもタカラガイが出土し、中原と雲南から流入したようである。これを「カウリーロード」とよぶ。

**第二章。**四通八達の地である雲南では、前漢初期頃に貯貝器に入ったタカラガイが大量に出土する。貝殻に穴がないので貨幣ではない。トンキン湾→紅河等→雲南と運搬されたようである。王莽期に中原と雲南の連絡が絶えると、雲南内部のタカラガイ関連史料は八世紀の南詔時代まで途絶える。だが紀元前二世紀→後七世紀の東ユーラシアが西北遊牧系勢力と東南農耕系勢力の拮抗状況（＝乾燥地域→湿潤地域間の交易をどちらが掌握するか）を経て、遊牧系

支配者が農耕社会を支配すると、チベット高原の吐蕃と唐帝国との分立（標高二五〇〇mを境とする標高差間交易をめぐる争い）が生まれた。吐蕃民はビタミン補充のために茶を欲し、唐と吐蕃は南詔・吐谷渾を巻き込んで抗争した。南詔の勢力拡大に伴い、タカラガイがインド洋やトキン湾から雲南に運ばれた。九〇二年の南詔の内乱で大理国が成立した後も、タカラガイは当地で用いられた続けた。

**第三章。**一三世紀半ばにモンゴルが大理を滅ぼした後も、モンゴル側の記録にタカラガイがみえる。モンゴルの進出に伴い、一二五七年にクメール人のアンコール朝からスコータイ朝（メコン中流）が自立し、一二九六年にランナータイ朝（チェンマイ中心）が樹立し、両地でもタカラガイは重視された。マルコッポロ、汪大淵（一三三〇年代）四〇年代に出航）、イブンバットウータのタカラガイ関連記事と、元朝側の記録とを総合すると、当時雲南には、①タイランド湾→タイ南部（ロップブリー）→スコータイ→雲南南西部シブソンプンナー、②インド洋モルディブ諸島→ベンガル湾→ミャンマー→雲南西部徳宏、③密輸ルート（中国福建の市舶司→中国内地→雲南）を通じて、タカラガイが齎された。

**第四章。**元代には銀を価値基準とする交易ネットワークが展開した。銀投資を受けたムスリム商人やウイグル商人

史苑（第七七卷第二号）

の運営するオルトク（非商社）が絹や陶磁器等の中国物産を購入し、代わりに中国に銀が流れた。元朝は商業税の形でその銀を回収し、各地に再分配し、またオルトクに投資された。だが一三二三年に即位した第一〇代イェスンテムルは権力基盤が脆弱で、ムスリム商人の支持を得るべく彼らの税を減免した結果、元朝中枢をポンプとする銀の大循環は滞った。さらにイェスンテムル死後の宮廷内抗争による財政破綻を救うべく、宝鈔（紙幣）が発行され、銀の裏づけのない宝鈔が各地で勝手に印刷され、ハイパーインフレに陥った。一方、銀価は持続的に向上し、銀価のさなる上昇を見越して銀保有者は銀をため込み、銀は滞留した。けれども一六世紀前半に日本で石見銀山、一六世紀半ばにポリビアでポトシ銀山の採掘が始まり、前者で灰吹法、後者で水銀アマルガム法が導入され、世界的な銀供給量が増加した結果、銀経済は息を吹き返した。一方、明の朱元璋は銀にたよらない国際的取引の仕組みとして、朝貢メカニズム（中国の皇帝を中心として、朝貢国のあいだで儀礼的な序列を形成し、国際的な交流を円滑に行なうメカニズム）を整えた。おりしも元朝末期雲南ではタカラガイ供給が不足していたが、かかる朝貢により、沖縄産タカラガイが中国内地経由で輸入され（民間対外交易は禁止）、雲南貝貨経済は息を吹き返した。

**第五章。**だが一六二〇年代〜一六八〇年代になると雲南貝貨は消失し、代わりに銅銭が流通するようになる。それ以前にも鑄銭の試みはあったものの、貝貨の存在を理由に中止されてきた。つまり貝貨消失は、銅銭流通によるのではなく、むしろ雲南へのタカラガイの供給減少が原因である。それは、一七世紀にモルディブを掌握したオランダ東インド会社がタカラガイを西洋に搬出し、また沖縄も一六〇九年の島津入りで日本の幕藩体制に組み込まれたことによる。一方、銭は嘉靖三四（一五五五）年以來清代にも、空間的画一性と時系列的貫性を守るべく鑄造され続けた。ただそれでも地域経済の成長に銅銭の数量は追いつかなかつた。また海外貿易・遠隔地交易で銀錠を、地域内で銅銭を用いる中、一六八四年に海上封鎖（台湾の鄭氏政権の財政基盤を奪うのが目的）が解かれ、生糸・陶磁器・茶葉の輸出が増加した結果、大量の銀が中国に流入し、銭の対銀価格は上昇せざるを得なかつた。

**小結。**タカラガイの形状は均一である。また雲南付近では、わずかな距離を運ぶだけで、大きな標高差があるため、タカラガイの希少性が増す。さらにタカラガイは持続性（貨幣となるモノが将来にわたって供給されつづけられる見通し）を有した。これら均一性・希少性・持続性がタカラガイを貨幣たらしめた条件である。だが第五章で論じたよう

に、タカラガイの供給が途絶えると、希少性が増す一方で、むしろその持続性が失われた結果、タカラガイの価値は下落し、雲南貝貨経済圏は崩壊した。以上が第一章〜第五章よりなる第一部の「時をたどる旅」の梗概である。

**第六章。**次に「場をめぐる旅」と題する第二部が始まり、現地調査を活かした成果が開陳される。主題は、ユーラシア大陸を南北に貫通するタカラガイ文化の帯（インド洋↓ベンガル湾↓インドシナ半島↓中国雲南↓チベット高原東縁部↓モンゴル高原）に住むチベット系・モンゴル系・ツングース系の人びとがタカラガイを儀礼で用いる背景と経路の解明である。まずタイではスコータイ王朝（一三世紀〜一四三八年）やアユタヤ王朝（一三五一年〜一七六七年）で少額貨幣の貝貨が確認できる。一八世紀半ばに陶製貨幣に代替されるが、それはモルディブ産タカラガイが西に流れた時期（上述）と一致し、タイでのタカラガイ供給の持続性が損なわれたためである。だがタカラガイは、インドシナ半島から雲南のムアン（盆地に囲まれた土着的な）にも伝播している。

**第七章。**タカラガイは雲南を経由してチベットにも伝播している。ナシ族ラハ村のアレとよばれる行事とそこで歌われる歌謡（原型は元代の記憶が残る明代前期に作成か）等を調査すると、ナシ族・漢族・チベット族等が棲み分け

ながら共存する世界が窺え、ナシ族やチベット族が隊商としてタカラガイを運搬した可能性がある。

**第八章。**チベットでもタカラガイがみられ、一七世紀以降その価値は減少したとはいえ、ラサでは現在もタカラガイが散見する。

**第九章。**チベット高原北側の青海省を中心とする地域（アムド）でもタカラガイはお守りとして広く流布している。

**第十章。**モンゴル高原東部く黒龍江省のツングース系・モンゴル系諸民族の間でもタカラガイが用いられている。産地を離れて北に行くほど、遊具↓通貨↓ハレの場の装飾品↓宗教的な装飾品と、タカラガイの神聖さが上昇する傾向がある。以上をふまえ筆者は、人類がペルシア湾沿岸でタカラガイと出会い、その後タカラガイは中国商王朝で威信財や護符として定着し、三星堆にも広がり、新たにトンキン湾岸やベンガル湾岸からの入手ルートを得た雲南で貨幣化したとし、これを古代のカウリーロードとする一方で、雲南貝貨世界崩壊後にタカラガイがより希少な地をめざし、雲南↓チベット↓モンゴル高原↓大興安嶺へ向かったとし、それを近世のカウリーロードと結論づけている。

以上が評者の理解に基づく本書の梗概である。一言でいえば本書は、タカラガイを軸に、東ユーラシア世界の歴史

と各地域の習俗を概述した好著と評せよう。とくに一七世紀以降の雲南を中心とした歴史描写はじつに鮮やかである。また、本書の提唱する「文明の交易史観」は、柄谷行人の「交換様式に基づく世界史構造」論やニクラス・ルーマンのコミュニケーション論をふまえた評者の「交換史観（つながりの歴史学、コミュニケーションヒストリー）」とも似た所があり、本書で「カウリーロード (cowrie road)」が詳細に探索されている点も評者の「殷周時代の）寶貝の道（柿沼二〇一、九八頁）」に関する研究と関連する所があり、ともに評者にとつてわかりやすい見方であった。

加えて、本書が現地調査をふまえた成果である点も特徴的である。母の従兄妹の網野善彦氏より「旅」の精神を受け継ぎ、「私の歴史学は常に「旅」とともにある」（第六章）と宣言する筆者の面目躍如たる行論であろう。中沢新一氏とは似て非なる網野遺伝子の受け継ぎ方で、改めて網野善彦氏のインパクトの大きさを思い知らされる。その成果が全面に生かされているのが第二部（第六章く第十章）で、個人的には第九章のアムドのランジャヤ村調査がとくに興味深かった。ここでは死者の名を口にしてはいけないため、村人は自らの「歴史」を知らず、同族集団も形成されず、冠婚葬祭等にはハオという互助的集団が形成される。上

田氏はこれを「漢族が執拗に祖先にこだわるのとは対照的（二九八頁）」とする。なるほど、共同体意識の稀薄な中国社会で生きてゆくため（戒能通孝・柏祐賢・村松祐次の議論参照）、中国人が「包」や宗族を頼りとする点や、近所付き合いの消滅と「おひとりさま」の増加の中で現代日本人がNPO団体等に福祉的役割を期待する点に比して、ランジャ村は非常に興味深い事例を提供するものである。こうした点は現地を歩いてみなければわからない。

ちなみに評者も、「フィールド歴史学」を掲げる母校早稲田大学の影響もあり、旅から歴史学的知見を得ることが少なくない。たとえば二〇一五年六月に東アジア最大のタカラガイの産地である沖縄県宮古島を訪れた時のこと。浜辺には様々な貝殻が落ちており、よほど目をこらさないとタカラガイは見つからない。これより、すぐに目に付くほどタカラガイが図抜けて綺麗なわけではない点を再認識できた。現地のタカラガイ専門店店長によれば、一時間に数個みつければよいほうだという。背部は脆弱ゆえ、浜辺に打ち上げられる際に削れるらしく、浜辺に打ち上げられたタカラガイの背部にはだいたいの穴があることも確認された。すると、世界各地の遺址出土タカラガイ背部には概して穴が開いている点について、それらは必ずしもすべてが人工的に開けられたものではない可能性が出てくる。た

だ、自然な開孔は殷周タカラガイ背部の穴（背磨式等）と形状が異なるため、後者はやはり人工的開孔と考えられるようである。こうした点はすべて旅によって得られた評者なりの知見である。その点で、旅を重視する筆者の考えには、評者も強く共感する次第である。

以上、本書がいかに面白く、各方面に考える種を埋め込んだ好著であるかを論じた。ただ書評の常として、全く私見を提示しないわけにもいかないので、あえて筆者の胸を借りる形で鄙見を提示したい（なお本書に「タカラガイを中国古代の貝貨とする言説は、柿沼氏も指摘するように、漢代に成立したと考えられる」（七二頁）とある点はやや不正確で、私見ではその萌芽が戦国時代に溯るとみるが、こうした瑣末な点には以下こだわらない）。

第一。本書は結局「貨幣の条件」として均一性・希少性・持続性を挙げる。雲南貝貨を貝貨たらしめる条件として均一性・希少性・持続性を挙げるのは正鵠を射ている。中でも持続性がいかに重要かは、拙著（六七〜六九頁）でも整理したように、近年よく指摘される論点である。ただ書名に「貨幣の条件」とある以上、一般書とはいえず、貨幣の条件全般に関する経済学と人類学における論争、とくにカール・メンガー『一般理論経済学』以降の諸争点に言及が欲しかった。

第二。筆者は「古代中原の墳墓から大量に出土するタカラガイは威信財なのか、貝貨なのか論争があるが、均一性と希少性とのバランスのなかで貝の価値が変わる以上、こうした二者択一的議論の立て方には意味がない(二〇一頁)」とする。だが当該論争は、貨幣の起源をどこに求めるか、ひいては古代人の心性の重心をどこに求めるか(経済合理主義的人間像が歴史に即したものか否か)に関わる。そして評者は、中国古代では贈与交換や供犠といった非経済学的原因を通じて結果的に貨幣が生じたのであり、中国古代寶貝を貨幣とみること自体が後付けの発想だと考えている。その意味で当該論争を無意味とは考えない。

第三。中央アジアではタカラガイを意味する「貝」の甲骨文字を中央に铸込んだシノロカロシユティー銭や、あるいは戦国六国の青銅貨幣やその影響を受けたとおぼしい古銭が出土している。よっていわゆるシルクロード上のタカラガイ使用の起源はじつは紀元二、三世紀以前に遡る可能性が高い。むしろ評者は、「殷周寶貝文化」の消滅と、それを担った人びとの拡散に伴い、戦国時代にはやくも中原から各地へ放射線状に寶貝文化が伝播したと推測している。この点は別稿で詳論したい。

以上論じたように、本書は読者にさまざまな論点を考えさせるきっかけとなる良書である。数点私見を提示はした

が、これらは当然本書の意義をいささかなりとも揺るがすものではない。これを機に本書を手取る読者が少しでも増え、当該分野の研究の発展を後押しすることができるならば、筆者同様にタカラガイを愛する者として喜びにたえない。

(帝京大学文学部准教授)